

まず最初に、
「前提となる話」と
「全体の枠組みについての話」を
いたします。

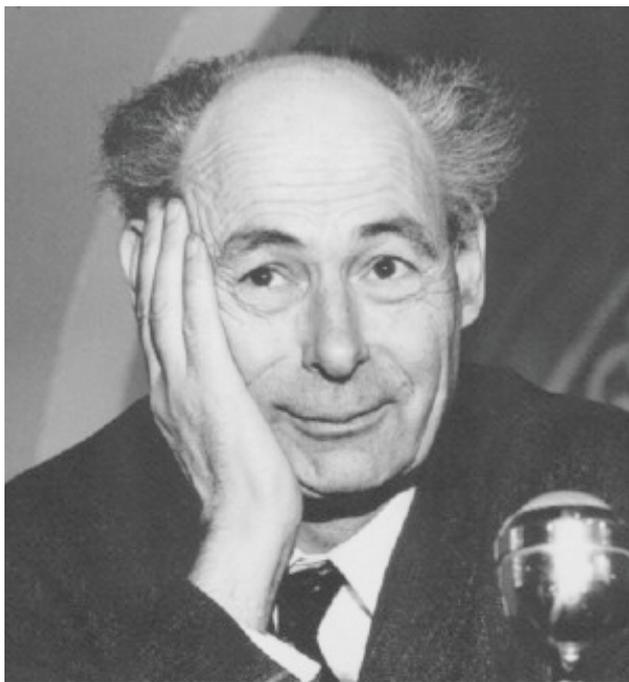
その次に、
「4つの辛さ」のそれぞれについて
簡単に説明をします。

最後に、
「スピリチュアルケアの要諦」として
4つのポイントを提示いたします。

巻末には、
未だ共通了解が得られているとは言い難い
「スピリチュアルケアに関する諸概念に
ついての定義」をお示しいたします。

「人間は分割できない統一体である」

ポール・トゥルニエ



<https://en.wikipedia.org/w/index.php?curid=13100942>

私は、生まれ育った関西を離れて札幌に住み始めた 25 歳の時に、ポール・トゥルニエさんのこの言葉に出会って医者になることを決意しました。「私たちは、人間は分割できない統一体であること、したがって医師と牧師の天職は水も漏らさぬ区分の中に閉じ込めることはできないことを、銘記しなければならない。このことは医師と教育者のそれぞれの領域についても同様である。」

このトゥルニエさんの言葉の中に、「人間は分割できない統一体である」という一節があります。

人間を身体(肉体)と心(精神)と霊(魂)とに分割して捉えるという人間観は、決して珍しいものではありません。デカルト流の物心二元論による人間理解は、今日、むしろ多数派の考え方と言っていいかもしれません。

しかし、トゥルニエさんによれば、人間は決してそんな風に分割することはできない「統一体」である、ということです。たとえ、便宜上、人間をいくつかの要素に分割して論じるようなことはあったとしても、そもそも人間という存在は分割することのできない一つの「統一体」である、と言います。このトゥルニエさんの見解は、基本的に正当なものであると私は思います。

そして、そのような人間観、そのような理解の仕方は、これから論じる私たち人間における「辛さ」についても言えることで、そもそも私たちが経験する「辛さ」というものは、色んな要素が混じり合って混然一体となった、「一人の人」における「一つの体験」であって、そもそも身体的・精神的・社会的・スピリチュアルなどといった枠組みに明確・明瞭に分割・分類できるものではありません。

私たちが経験する「辛さ」というものは、「一人の人」が全人的に経験している「一つの体験」です。この点を、まず初めに確認しておきたいと思えます。

本書が扱う主題は、スピリチュアルペインであり、スピリチュアルケアですが、では、なぜそんな風に「辛さ」の分類などするのか？と言いますと、それは、そうすることによって私たち援助者がより適切かつ有効な援助ができるであろうと考えるからに他なりません。

「一つの現実」としての「辛さ」



例えばこちらの絵をご覧ください。

ここに大きな「辛さ」を体験しているであろう「一人の人」がいます。

痛いでしょう。不快でしょう。ご飯も食べられないかもしれません。気持ちも落ち込むでしょうね。不安でしょう。イライラする時もあるでしょう。おそらく仕事をするのは無理でしょう。治療費もかかりますね。人に会いたくないでしょうね。ひょっとしたら夫や姑など自分の家族からも疎まれていたりするかもしれません。もしかしたら「こんな状態なら死んだほうがまだ」「こんな姿で生きる意味なんてない」と思っているかもしれません。「罰が当たったのだ。当然の報いだ」と感じていたり、あるいは神や仏に対して「なぜですか？私が何をしたというんですか？」と食ってかかりたい心境であったりするかもしれません。いずれにしても、この人の「辛さ」は、この人がまさに体験しているところの「一つの現実」です。

しかし、「一つの現実」とだけ言ってすませているのでは、実際問題としてどこから手を付けていいかわからずただ途方に暮れる、というようなことにもなりかねません。